

# Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



## みすず書房の本棚

[無料送付]

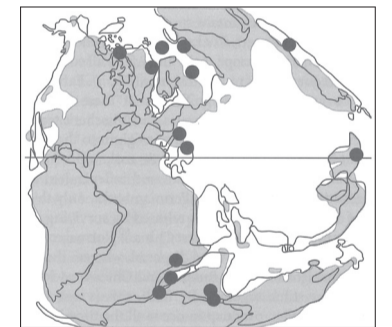
No.13 2014冬

(表示価格は税別です)

113-0033 東京都文京区本郷5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

### 「知のギャップ」を埋める

大河内直彦



図(D・ビアリング『植物が出現し、気候を変えた』より) 世界中のペルム紀末の地層から見つかる異常な植物胞子や花粉の化石が、地球規模の環境変化を示唆する。図中の黒丸は、特に高頻度で化石が見つかる地点(大陸の配置は2億5100万年前当時のもの)

現代の自然科学は、文字通り日進月歩である。毎週わんさか出版される論文にすっかり目を配っておかないと、あっという間に取り残されてしまう。研究者を取りまくこういう現実がある一方で、高等教育で教える内容と量は、私が知る限りそれほど増えてきたわけではない。この二つのことの論理的な帰結として、先端研究と大学や大学院で習得する科学の知識との間に「知のギャップ」とでも呼ぶべき知識の希薄な部分がある。研究者個人の中に生じることになり、この「知のギャップ」は、近年多くの研究者に共通して見られるだけでなく、間違いなく世代とともに拡大の一途を辿っている。裏を返せば、研究者としてトレーニングされた「専門家」と呼ばれる人々は、少し異なる研究分野になるとまったくの無知といういわゆる「専門家」にならざるをえないことになる。個々の分野の最先端でしごきを削っていくと、周囲の研究分野などに注意を払っている暇はなかなか取れないわけだから、同じ研究者として理解できるし、責められるものでもない。かつての大学の教養学部には、このような流れに楔を打ち込もうという姿勢が見られたように思う。学際性の重要さを主張し、学問が細分化される時代の流れに對抗しようとしたのである。しかし実は結ばなかった。世の趨勢に押し流され、結局、全国の大学から教養学部は姿を消していった。一昔前、社会科学において教養主義が没落していったように、自然科学でも同じことが周回遅れでやってきたのだ。今後、この状況がさらに進行すれば、研究者(者)の世界とは、巨大なジクソーパズルのピースだけが散在する、道なき知のジャングルと化してしまうのだろうか。

この「知のギャップ」はすでに、深刻な問題を引き起こしつつある。たとえば最近はやりの研究および研究者の評価である。その道では一流といえども、少し異なった分野の研究を評価するための基礎的知見に欠けた研究者は多い。結局、論文の本数や被引用回数といった、テレビの視聴率や音楽のヒットチャートのような指標で他人の研究を評価せざるをえない憂うべき状況が必然的に生み出されている。最も高い視聴率を取る番組が最も優れた番組ではなく、ヒットチャートのトップが最もすばらしい音楽でないことは誰もが知っているように。

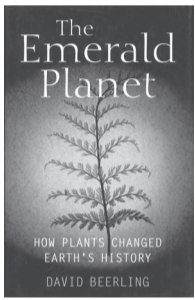
地球環境や気候変動に関する研究分野は、「知のギャップ」が蔓延する現状の悪影響をものに蒙っている。こういったテーマが元来、学際的な知見を必要とするからだ。溶液化学に基礎をおいた海洋化学、流体力学を応用する大気物理学、生物の動態を知る生態学……多様な分野における個々の成果を単にバイナリする

## 植物進化の視点から復元する地球史

デイヴィッド・ビアリング

《植物が出現し、気候を変えた》

西田佐知子訳



「私が今年読んだノンフィクションのベストワン。……ダーウィンの著作を読むときにも似た、深く、静かな読書の愉しみを与えてくれた。」(オリバー・サックス、二〇〇七年の『地球環境・進化』二月下旬刊) (四六判・384頁・予価三四〇〇円)

をもった植物が出現して広がるという進化や適応のイベントが起き、それがまた大気や土壌に、思いがけない規模の影響を与えるのである。進化生物学と地球科学の知見を総合するこの「古生物気候学」という新しい科学分野の若き旗手である著者が、新分野の知見や可能性を生きてと語っている。大胆な仮説の数々も含まれ、科学的推理読本の興がある。

この本はまた、著者の個人的な想いが多分に詰まった読み物でもある。一般に、客観的な知識の伝達は退屈な読み物になりがちで、著者の自然観を前面に押し出したものというが、一般の読み手には受けがいいものだ。しかしこの事実は、科学者が科学書を著す際に大きなジレンマを生む。科学者が脳裏に描く冒険心に満ちた「絵巻物」を文章にまとめることが、客観的な事実を最も重視する科学者のあるべき姿とうまくフィットしないからである。しかしそのジレンマを乗り越えれば、そこには大いなる御馳走が待ち受けていることをこの本は証明している。

研究者が教育を受ける時間は限られたままとはいえず、知の先端は構いなしにどんどん進んでいく。しかし目利きのいい研究の世界など、指揮者のいないオーケストラ、いかりや長介のいないドリフターズ(古いか)に等しい。本物とそっくりの姿形をした偽物もはびこりやすくなる。科学者は社会の科学リテラシーの向上にも時間を割かねばならない。一人何役もこなさねばならない研究者にとって、般に閉じこもって玉を磨く時間は短くなる一方だ。自然科学の目利きによつて著された本書は、成果と魅力の両面を余すことなく伝え、多くの研究者に代わってそういう役割を担ってくれるはずである。(おおこうち・なおひこ 海洋研究開発機構 分野長)

全米で評判を呼んだ科学読み物の邦訳。冒頭、著者は植物史がこれまでいかに軽視されてきたかという話題から書き起こしている。多くの科学書で、植物の進化は「かなり退屈な章なので、飛ばしてしまおう」と言わんばかりの扱いを受けてきた。最近二〇年の新たな研究によれば、植物の進化史は地球の景観や気候をダイナミックに形作り循環させてきたのだと、著者は宣言している。植物と聞いて誰もが想像するようなおとなしいイメージではない。各章のタイトルを一瞥しても、「酸素と巨大生物の『失われた世界』」「オゾン層大規模破壊はあったのか?」「地球温暖化が恐竜時代を招く」「南極に広





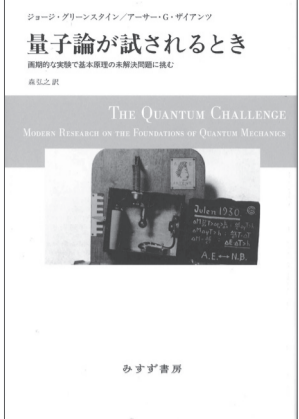


# フアンタスティックな量子実験

G・グリンスタイン/A・G・ザイツァッツ 《量子論が試されるとき》 画期的な実験で基本原理の未解決問題に挑む

「こんなに多くの、そして重要な疑問がまだたくさん残されているのに、どうしてあなたはそれほどあなたの理論に確信をもてるのですか？」これはアインシュタインが量子力学の創始者であるハイゼンベルクに対して一九二六年に発した問いである(ハイゼンベルク『部分と全体』より)。ここでアインシュタインの言う「重要な疑問」は、かつて人知を超えた問題、純粋に哲学の問題として扱われていた

時期もあつた。しかし現代の物理学者たちは高度な技術と創造性を駆使した実験によって、これらの難題を解き明かしつつある。本書はそうした、現代量子物理学の新局面を開いた実験を取り上げ、現象の機序を深く理論と合わせてリアルに体感させる。波と粒子の二重性、相補性、非局所性、量子のからみあい、そして量子情報といった最新のテーマまで、幅広くカバーしている。



量子論が試されるとき

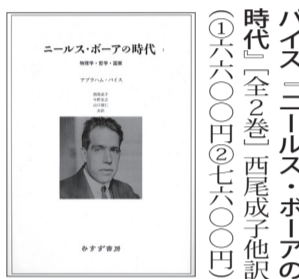
予備知識のある読者にとっても、かつてない手ごたえとともに、ミクロの世界への驚きと好奇心が呼び込まれる。量子力学を学んだが物理現象としては実感したいという悩みへの特効薬としても、本書を開いてみてほしい。『物理学』(四六判・464頁・四六〇〇円)

# 人文研究の可能性

下河辺美知子 《グローバリズムと惑星的思想》 想像力 恐怖と癒しの修辭学

「反知性主義がはびこる現在の国際情勢、国内情勢の中で、知的活動に人文系学問は、経済的脈絡による成果主義によって押しつぶされているのが現状である。グローバル主義の中の人文研究の苦境のわけを明らかにして、その理由そのものの中にグローバル主義を批判すべき根拠を突き止めることの中に、人文研究が世界を生きのびさせ

る可能性があるはずである。トラウマ研究を中心に現代思想とアメリカ研究を横断してきた著者による眼から鱗の論集。スピヴァクの「惑星的思想」概念を基調に「グローバル」「暴力」「恐怖」などにアクセントを置き、ペインやモンロー・ドクトリンの読解からアレント、デリダ、ドマンまで、人文研究の可能性を追求する。著者既刊『トラウマの声を聞く』(二八〇〇円)を継ぎ、第2弾。現代思想・アメリカ論【一月下旬刊】(四六二七頁・予価三八〇〇円)



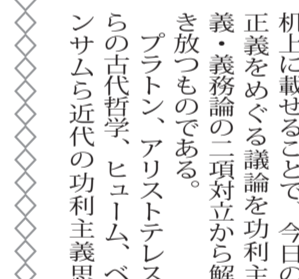
グローバリズムと惑星的思想

# 功利主義、義務論、相互性

D・ジョンストン 《正義はどう論じられてきたか 相互性の歴史的展開》 押村・谷澤・近藤・宮崎訳

十八世紀末以降、正義をめぐる議論は、功利主義と義務論の二つの立場へと収斂されてきた。しかし、正義論の勢力地図をこのような分類法に基づいて描くならば、それ以前の四百年にわたる正義をめぐる思想を存在しなかったことになってしまう。本書は古代バビロニア、古代イスラエル、また古代ギリシアの法や思想にみられる「正義の源流」に遡り、「相互性」という古来から用いられてきた正義の概念をふたたび机上に載せることで、今日の正義をめぐる議論を功利主義・義務論の二項対立から解放するものである。

プラトン、アリストテレスらの古代哲学、ヒューム、ベンスサムら近代の功利主義思想を四分する習慣を遵守してきた。キリスト教徒、ユダヤ教徒、マホメット教徒、その他「余剰がある時代」では十分実現可能である。自閉症を切り口として望ましい社会構想に至る本書によって、読者は、たとえば、理由・事情に関わりなくしたくないことをせずに済むような社会が本当に成立するかどうか、責任や義務と負担や苦痛の関係はどうなっているのかなど、あるべき社会のあり方を考える上で避けられない、根本的な問いに誘われるはずである。(ほった・よしたろう 哲学/倫理学)



正義はどう論じられてきたか

# みすず書房新刊

《4月》 行動の構造 上 メルロ・ポンティ 生理学・心理学を検証し意識と自然との関係を問うデヴィュー作 滝浦静雄 木田元訳 加國尚志解説 三三〇〇円 《6月》 テクニウム テクノロジーはどこへ向かうのか? クレイ・インベリションの普遍法則とは? 『ライヤード』創刊編集長によるテクノロジ版『種の起源』電版版部註 四四〇〇円 《8月》 アメリカ(帝国)の現在 イデオロギーの守護者たち ハルトウーニアン 民主主義がテロとの戦いに至った経緯を冷戦まで遡りライヤード、ネグリほかを検証 平野克彦訳 三四〇〇円

《始まりの本》 『政治思想史・法哲学史』(二月上旬刊) (A5 280頁・予価四四〇〇円) 《好評既刊 七人の哲学者によるオックスフォード・アムネスティ他『人権について』 中島吉弘他訳 (三二〇〇円)

《始まりの本》 『ジャッキー・デリダの墓』 鶴岡哲 没後十年、哲学者のみならず人間としてのデリダの後期著作を軸に、繊細かつ強靱な思考を伝える待望の書 三三〇〇円 《英語化する世界、世界化する英語》 ヒッチンズ 英語よ、どこから来てどこへ行くのか? 気鋭が放つ異色の英語史『スリリングな英語進化論』 田中京子訳 六二〇〇円 《ノイズ/ミュージック》 歴史・方法・思想 ルンロから七〇年代までヘガレ、実験音楽やロック、パンク、プログレ、ジャズにおけるノイズの思想と方法を考察する。若尾裕・嶋田久美訳 五二〇〇円

《5月》 『空(くう)の気』 自然と音とデザインと近藤壽則 佐藤卓 最先端のトランペットとデザインとの対話 聴覚・視覚の感性領域を交わらせる創造のエッセンス 二六〇〇円 『サルなりに思い出す事など』 神経科学者がヒトと暮らした奇天烈な日々 サボルスキー アフリカでヒトと暮らした歳月を満載のユーモアと哀情とともに綴る。各紙誌書評で絶賛 3刷大沢章子訳 三四〇〇円 『兵士の報酬』 随筆コレクション1 野呂邦暢 没後三〇年、再評価したい作家の精神と文体。本巻は一九六二―七七年発表の随筆他25編収録 池内紀解説 六八〇〇円 『私はリスムム&ブルースを創った』 ウェルスのゴッドファーサー』 自伝 ウェクスラー/リッツァー アトランティックコードでR&B、ウィル黄金時代を築いたプロデューサー自伝 新井崇嗣訳 四四〇〇円

『丸山眞男話文集』 続2 『福沢における文明と独立』 『著作ノート』から長野オリンピックまで』 ほか講演・座談等全6編 丸山眞男手帖の会編 五四〇〇円

# 堀田義太郎 《自閉症連続体の時代》を読む



自閉症連続体の時代

立岩氏によれば、脳の病気が、今の社会には「余計な」仕事を人にさせるしかならないほど「余裕」があるというところにある。つまり、「自閉症連続体の時代」とは社会全体として「余剰・余裕」がある時代である。

ここから本書は、だれもか。その主要因は、自閉症連続体の人々が苦手とする「人間関係」に関わる仕事が大勢を占めるようになってきたことにある。そして立岩氏は、実は人間関係に関わる仕事が増加していること

本書は、広く自閉症連続体(スペクトラム)とされる状態に関する論争を通して、現代社会を捉え直し、望ましい社会を構想する本である。自閉症連続体については「脳」の障害が原因だという説が一般的になっていく。そして自閉症は脳の病気が、脳が原因だという説が受容される背景を掘り下げる。

# 近代ヨーロッパの自己意識

増澤知子 《世界宗教の発明》 中村圭志訳

「幾世紀にもわたって、ヨーロッパ人は、世界の諸民族を四分する習慣を遵守してきた。キリスト教徒、ユダヤ教徒、マホメット教徒、その他「余剰がある時代」では十分実現可能である。自閉症を切り口として望ましい社会構想に至る本書によって、読者は、たとえば、理由・事情に関わりなくしたくないことをせずに済むような社会が本当に成立するかどうか、責任や義務と負担や苦痛の関係はどうなっているのかなど、あるべき社会のあり方を考える上で避けられない、根本的な問いに誘われるはずである。(ほった・よしたろう 哲学/倫理学)

『丸山眞男話文集』 続2 『福沢における文明と独立』 『著作ノート』から長野オリンピックまで』 ほか講演・座談等全6編 丸山眞男手帖の会編 五四〇〇円

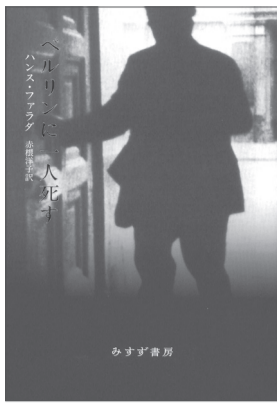


プリーモ・レーヴィが「ドイツ国民による反ナチス活動を描いた最高傑作」と言った小説が、ドイツ語無削除完全版からようやく翻訳された。

一九四〇年、ナチス支配下にあるベルリンの街の片隅で、クヴァンゲル夫妻は一人息子の戦死を知らされる。目立たぬように生きてきたオットーは妻アンナに固い決意を静かに告げた。ヒトラー攻撃の葉書を公共の建物に置き去る。読む者は目覚めるだろう。「あなたがやろうとしていることはちよつと小さいんじゃないの?」「大きかろうと小

## 反ナチス小説の最高峰

ハンス・ファラダ  
《ベルリンに一人死す》  
赤根洋子訳



さかろうと、嗅ぎつけられたら最後、命はない」この反体制活動は、ほとんどゲシュタポの知るどころとなり、綿密なエッセルリヒ警部による執拗な捜査が開始される。いったいどんな組織がこれほど大胆な事件を起こしているんだ。息詰まる追跡劇と夫妻のたどる悲劇的運命をこの小説は、周囲の登場人物のしぐさまでくつきりと、揺るぎない筆致で描いてゆく。本作を書き上げて三ヶ月後の一九四七年二月五日、作者ハンス・ファラダは死んだ。戦前の人気作家、戦中は「望ましくない作家」だったファラダが、わずか数年前に実際に起きた事件を種に類いまれな想像力で作り上げた『ベルリンに一人死す』。爾後六〇年余、英訳でベストセラーとなり「コンラッドの恐怖、ドストエフスキーの狂気、カポティ『冷血』のぞくつとす

## 知られざる文化空間

関口時正 《ポーランドと他者 文化・レトリック・地図》

一九七四年、ポーランドのクラクフに留学した著者はポーランド人に「西側世界から来た東方の」他者として映った。その時代に始められた議論と対話は、ずっと続いている。大学でも、「ポーランド人の自画像、他画像」「ポーランド防壁論」「ポーランドを巡る言説」といった授業を続けてきた。日本におけるポーランド文化研究の第一人者



にして、詩を始めとする古今の文学作品、シヨパンの伝記および書簡集などのすぐれた翻訳者の論考集が、ここにとつと一巻となった。音楽と詩文学の同時代性を見定めるシヨパン論、アヴァンギャルドの宿命とナチス占領下の二〇世紀ポーランド美術、特異なまでに「民族」を語り続ける文学、中世に遡る「防壁」としてのポーランド

文化のジャンルを越えて、ポーランドの人々が表現してきたことを精密かつ丹念に記述した堅固な文章群を、書物というかたちで通覧するとき、ヨーロッパとアジアの間に位置するポーランドの、複雑で魅力的な文化の深奥部に触れることになるにちがいない。「文化史・中欧地域研究」(A5判・368頁・六六〇〇円)

る感じ」があると評された話題作である。「海外文学」(四六判・616頁・四五〇〇円)既刊より

リアリズムの長編小説で、時代の雰囲気がありありと伝えるという意味で、本書に近い作品を挙げるとすれば、ワシリー・グロスマン『人生と運命』(全3巻、齋藤統一訳①四三〇〇円②③各四五〇〇円、小社刊)や、イレニス・



ネミロフスキー『フランス組曲』(野崎敏・平岡敦訳、白水社刊)でしょうか。そのほか、ナチス支配下のドイツおよびベルリンを描いた本なら、歴史書であれ、小説であれ、本書の関連書といえます(次面もご参照下さい)。

## ケストナーの最高傑作、初の完全版

エリヒ・ケストナー

《ファビアン あるモラリストの物語》

「今さ、30歳で結婚できるやつって、いるか? 失業してやるやつもいるし、明日でも失職するやつもいる。これまで一度も就職したことのないやつもいる。ぼくらの国は、後の世代が生まれてくるってことに準備できてないんだ」小説の主人公ヤコブ・ファビアン、32歳。タバコ会社の広告部勤務、ベルリンのアパートに一人暮らし。



「今さ、30歳で結婚できるやつって、いるか? 失業してやるやつもいるし、明日でも失職するやつもいる。これまで一度も就職したことのないやつもいる。ぼくらの国は、後の世代が生まれてくるってことに準備できてないんだ」小説の主人公ヤコブ・ファビアン、32歳。タバコ会社の広告部勤務、ベルリンのアパートに一人暮らし。ワイマル共和国末期の類稀的な空気に覆われたベルリンを親友ラプデと徘徊して

「日本ではここに、『エミールと探偵たち』をはじめとする明るく前向きな児童文学の作者としてのみ語られることの多いケストナーだが、近年本格的な伝記や《原典版ファビアン》とも呼ぶべき『犬ども前に行く』が刊行されて、シニカルな風刺家にして大胆なモラリストとしてのもうひとつの顔がクローズアップされはじめています。自伝的モチーフをそなえ、自身も特別の思い入れをもっていたとい

「『つねに客観性を失わずに語るためには、したり顔した意見は抑制しなくてはならない。客観性をつらぬいた上で個人的メッセージを伝えるには、よく見て、よく聞いて、その上で判断する手づきが必要だ。むろん、それを自分に確認するだけの強い意志があつてのこと』(江藤文夫) 目立たぬ場所であり、自由で、そして自立した精神でこつこつと生きた人たち。自分のおたまたまで考えるために、示唆を与えてくれる本たち。たとえば岡本武司(一九三

## 東と西をめぐって 既刊より

かくも鮮やかな文学的「精神史的考察」A・シニヤフスキー『ソヴィエト文明の基礎』沼野充義他訳(五八〇〇円)。国が消えるとはどういう事態か。カント生誕の国からヒトラーの皆へ、過去を尋ねて来を探る紀行。池内紀『消えた国 追われた人々』東洋文庫『ロシアの旅』(二八〇〇円)。どこにも行くところがなかつた。第二次大戦末期にリト

アニアを出国、戦後はドイツの難民収容所をめぐりアメリカへ。詩人・映画作家J・メカスの原典『メカスの難民日記』飯村昭子訳(四八〇〇円)。そして、ホロコーストで最大の犠牲を出した国の今日に至る史実を、日記や写真、抑された記述で伝えるF・テイフ編著『ポーランドのユダヤ人』阪東宏訳(三二〇〇円)。

「つねに客観性を失わずに語るためには、したり顔した意見は抑制しなくてはならない。客観性をつらぬいた上で個人的メッセージを伝えるには、よく見て、よく聞いて、その上で判断する手づきが必要だ。むろん、それを自分に確認するだけの強い意志があつてのこと』(江藤文夫) 目立たぬ場所であり、自由で、そして自立した精神でこつこつと生きた人たち。自分のおたまたまで考えるために、示唆を与えてくれる本たち。たとえば岡本武司(一九三

登場する人々——岩本素白、須崎忠助、森於菟、江藤文夫、杉浦日向子、加藤周一、メネトラ親方、モラエス、チャペック、ヤン・カルクスキ、白バラの大学生ほか多数。【エッセイ】『二月上旬刊』(四六八頁・予価三〇〇〇円)▼著者既刊『あだ名の人生』(二六〇〇円)『祭りの季節』(二六〇〇円)『池内郁』(三二〇〇円)ほか多数。



池内紀・画

## みすず書房新刊

(2014・1・10) 3  
東京・文京本郷5  
区三三三(四三〇三)  
(価格は税別です)

### ロシア・ピアニスムの贈り物

原田英代「歌う響きを解明したい。かつてリヒテルと競った名匠の愛弟子ピアニスト、ロシア音楽界伝承の技法に迫る。三六〇〇円」

### 英語教育論争から考える

鳥飼美子「大論争を徹底的に再考。小学校英語、英語による授業、TOEFL導入、英語公用語など重要問題への提言。二七〇〇円」

### 自閉症連続体の時代

立岩真也「自閉症・発達障害・ADHD。病と社会の関係の再考。責任を過剰に問われることのない社会を構想する。三七〇〇円」

### つつわの歌 題

最晩年の心境を歌った「残る日々」など未発表作品多数の新編集愛蔵版詩集。訳詩「ハル・シル・ジブライ」の詩「他含む。二八〇〇円」

### 黒ケ丘の上で

チャットウイン「没後二五年、人気が高まり続ける作家の長編。ウエルズの子兄弟の百年を豊かに物語る。榎本伸訳。三七〇〇円」

### ボビー・フィッシャーを探して

ウエイツキン「チェスに魅了された天才少年と父親の物語。チェスに魅了された人々の世界を深く描き出す。若島正訳。二八〇〇円」

### 狼男による狼男

フロイトの「最も有名な症例」による回想。ガレイナー編著。フロイトに出会い、「狼男」の人生はどのように変わったか。回想録に分析記録を加えた名著。馬場謙一訳。五四〇〇円」

### 波止場日記 労働と思索

ホフター「知識人はなぜ大衆と対立するのかわ。沖仲士の哲学者」による日々の思索の結晶。田中淳訳。森達也解説。三六〇〇円」

### むずかしさについて

ライター「表題作「エロスと用語法」他全八編(脱領域の知性)円熟期の牙え渡る文明批評。加藤大河内岩田訳。五二〇〇円」

### 福永武彦とその時代

渡邊一民「敗戦直後から小説の新たな地平を切り開いた作家の文学的軌跡。死去直前までつづられた遺稿。宇野邦一解説。三八〇〇円」

### 科学・技術と現代社会

池内了「われわれの生きる社会と科学・技術は、どう相互影響してきたか。多様な事例から問題の本質に迫るライフワーク。四二〇〇円」

### 科学・技術と現代社会 下

池内了「科学者の倫理と社会的責任、安全性の考え方、エネルギー資源や情報化問題。現代の危機を知るための百科全書。四二〇〇円」

### いと高き貧しさ

修道院規則と生の形式。アガンベン「法権の外に生を求めたフランチェスコ」を託筆。修道院に、大量消費社会を超える思想を読む。上村・太田訳。四八〇〇円」

### 大脱出 健康、お金、格差の起原

デイヴィン「最新豊富なデータで、脱出した先進国と残された途上国との格差を分析する『健康と富の経済学』。松本裕訳。三八〇〇円」

### 復刊 [3月]

永く読み継がれる本、息の長い出版をめざすみすず書房では、品切書目の復刊を随時おこなっています。

### アメリカの反知性主義

ホーファスター「50年代マッカーシー旋風を受け自国の政治文化に心血を注いだ歴史家の今こそ必読の書。田村哲夫訳。五二〇〇円」

### 書物復権 2014 [5月]

第18回を迎えた『書物復権』10社共同復刊におきまして、皆様からのリクエストにより、次の書籍を復刊いたしました。

### ヘーゲル伝

ローゼンクランツ「ドイツ観念論の継承発展の過程を中心に、その誕生から死までを描く。同時代人による伝記。中野肇訳。五五〇〇円」

### トルコ近現代史

イスラム圏から開国国家へ。新井政美「西洋との絶えざる交渉の中で、中央集権的国民国家への変身をこころざした三世紀をたどる興味津々の通史。四五〇〇円」

### 関係としての自己

木村敏「私」とは何か、「自己」とは何か「生命と存在への透徹したまなざし」とおし、そのありかたの謎に迫る。三三〇〇円」



ユネスコの世界遺産プラハを訪れた観光客の目を驚かす。街を埋め尽くすバロックの遺産。プラハはローマなど並んでバロックの中心都市であったにもかかわらず、本国でも近年ようやくその見直しが始まったばかりで、バロック研究の中でまさに「そこだけが空白」だった。そのプラハのバロックの歴史を、劇的で複雑なチェコの歴史の裏に分け入り、そこに生きた人々の精神性から解き明かす、日本語で書かれた唯一の研究書『魅力的な紹介の書』が本書である。

## チェコの精神性を解き明かす

石川達夫

《プラハ・バロック 受難と復活のドラマ》



ストラホフ修道院内図書館 (著者撮影)

数百年にわたって一面的で否定的な評価を受けてきたが、イタリアやスペインなどカトリックの本拠地から押し付けられた外国からの借り物でない、独自の個性をもっている。三十年戦争後の荒廃に対する絶望、不確実性の感覚と確実性への希求、受難から再生へと向かうとする復活への祈りを画布に、石に刻みつけたバロック的メンタリティーがいま初めて明らかになる。図版217点収録。「歴史・西洋美術・建築」(二月上旬刊)(A5308頁・予価五八〇〇円)

## カオスマミックな詩的自信

フェリックス・ガタリ  
宇野邦一・松本潤一郎訳

《リトルネロ》

「いつもいっしょだったあの歳月の後、別離という試練はカールを茫然自失させ、余裕もなく立ち直ることもできず、彼は現実と直面するしかなかった。ある神秘的遺産を除いて、けつて宗教ではない。けつて超越性ではない。ひび割れた内在性、まったく未熟でもある。それはいつも何かの役に立つだろう。自己と宇宙の征服。ヴィクトール・死の代償として鈍固められ

た魔術的全能。彼はついに何がなんでもベルナデットに対する愛を強めることになった。そこにどれほど距離があるろうと。だが他者、第三者が木霊し、侵入し、痛みを与える。ジョフリーがいつもいたるところにいる。カオスマミックの指針。…」

「なんと感動的で不思議なテクストでしょう、幼少期、芸術思考が混じりあっている。ジル・ドゥルーズいわく、たインタビュー「分裂分析のほうへ」を付す。「現代思想」(A5判・184頁・四八〇〇円)

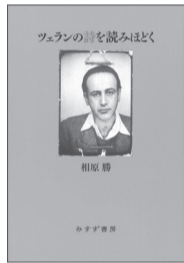
▼著者既刊 『アンチ・オイディプス草稿』(五八〇〇円)



## 詩は「心」との再会

相原勝 《ツェランの詩を読みほく》

「私の詩が私の履歴です」——ホロコーストを生きた延び、アウシュヴィッツ以後に残る言葉を極限まで突き詰めた詩人、パウル・ツェラン (Paul Celan 1920-1970)。ツェランの詩は難解だ。注釈や研究書はすでにあふれるほど出ている。しかし、ツェランにとって詩とは、「他者の運命」との「出会い」であり、「再会」であった。そこで読者は、みずからにあらかじめそなわっている「心」との再会によって、詩と出会うのである。



▼既刊より

1編の詩には1つの主題がある。その主題こそが、出会いべき詩の心、すなわち核心である。西欧と死の国、忘却の家、ドイツ語、キリスト教とユダヤ人、シオニズムとの葛藤、ネオナチとの闘い、水

## 『人間の条件』独語版からの翻訳

ハンナ・アレント  
森一朗訳

《活動的生》

「私がかげようと思うのは、活動しているときわれわれは何をしているのか、をじっくり考えることであって、それ以上ではない。ささやかなようにして本書の序論」にあるこの言葉には、アレント政治哲学のすべてが凝縮されている。

「人間の条件」のドイツ語版は英語版の翻訳である。そのままたる翻訳ではなく、他者による粗訳をもとにアレント自身が本格的にテキストに手を入れたものである。とりわけ詩の引用などの文学的側面での註釈が大幅に書き加えられている点などから、近年の専門的な研究では別の書としてとらえられることもある(矢野久美子『ハンナ・アレント、あるいは政治的思考の場所』(本面下広告)など)。

「人間の被制約性」「公的な答のひとつが、本書である。

「人間の被制約性」「公的な答のひとつが、本書である。

## ナチス支配下を描く 歴史書から小説まで

小社刊の多くの関連書から一部を紹介。ホロコーストを崇高に綴る自伝的小説『エリ・ヴィーゼル』『夜』(新版村上光彦訳(二八〇〇円))。少年少女の目を通して描く20の物語『グールドン・パウゼヴァング』(そこに僕は居合わせた)『語り伝える、ナチス・ドイツ下の記憶』(高田ゆみ子訳(二五〇〇円))。アウシュヴィッツから生還したのち、どう生きたか。マгда・

オランダの『ラフォン』(四つの小さなパン切れ)『高橋啓訳(二八〇〇円)』。ゲッティの地下深く埋められ、戦後発掘された日々を克明な記録『E・リングゲルブルム』(ワルシヤワ・ゲッター)『捕囚一九四〇—四二のノート』(新版大島おかり訳(四二〇〇円))。極限下の日常に音楽があった。歌は記憶庫となった。音楽による社会史、シルリ・ギルバート『ホロコーストの音楽』(ゲッターと収容所の生)『三階宗人訳(四五〇〇円)』。



もの空間と、私的なものの領域「労働」「制作」「行為」活動的生の全6章。『全体主義の起原』と並ぶアレントの名著を、『人間の条件』を讀んだ人もそうでない人も、是非熟読していただきたい。

「不正義の果て」(13)が、来年2月より劇場公開される予定です。アウシュヴィッツ強制収容所解放の日から70年の1月27日には、同監督作品の上映イベントも企画され、あわせて書店での関連書フェアも展開予定です。イベント、映画についてのお問い合わせは、マーメイドフィルム (http://mermaidfilms.co.jp/contact.html) まで。

## みすず書房新刊

(2014.1.10) 4  
東京文京本郷5  
区三軒三丁目(三)  
(価格は税別です)

### みるきくよむ

レヴィ・ストロース 創造の源泉とは、芸術の普遍性とは、文化人類学の泰斗が、思考の快楽へといささか。竹内信夫訳 三五〇〇円

### 第一次世界大戦の起原 改訂新版

ジョルジュ・デュロイ 運命の夏へと至る、歴史のダイナミズムと精神状況を再現。初版刊行のち八年間の研究を積み込む。池田清訳 四二〇〇円

### 東京国際ブックフェア記念 新装復刊 [7月]

年に一度の本の祭典「東京国際ブックフェア」を記念して、次のロングセラーを新装版で復刊いたしました。

### 我と汝・対話

ブーバー 私とは何か、他者とは何であるか? この根本的な問いの中から、人間の全体性の回復をめざす。田口義弘訳 三三〇〇円

### 全体主義の時代経験

藤田昌三 「安楽への自発的隷属」はいかにして生まれるのか。20世紀史への深い洞察をもつて社会的な変化を見つめる。三三〇〇円

### 臨床精神病理学序説

シュナイダー 疾病の根本を、初学者にわかりやすく、簡潔かつ明快に記述した精神医学のみどころな入門書。西丸四方訳 二六〇〇円

### 二十世紀数学思想

佐々木方 現代思想の生成過程に数学を紹介して立ち入り、数学基礎論論争、現象学との交流、コンピュータ社会を考察する。三三〇〇円

### 基本図書限定復刊 [8月]

各専門分野で基本文献とされ、しかも専門の枠を越えて広く永く読み継がれる基本図書を選び、復刊しています。

### ルドン、私自身に

少年の日の記憶。普仏戦争での兵士の体験。植物学者や銅版画家との交流……ルドンの言葉、一〇〇の断章。池田一郎訳 四二〇〇円

### 死

ジャンケル・ライツィチ この、人類永遠のテーマを主題とする三つのモチーフが奏でる、思索のポリフォニー。仲澤紀雄訳 七八〇〇円

### ジャコメッティ

矢内原伊作 偉大な芸術家の仕事の日夜、対話の貴重な記録。ヤナイハらの名を不滅にした書。宇佐見英治・武田昭彦編 五四〇〇円

### アルバム・ジャコメッティ

矢内原伊作 写真文。アトリエで、カフェで、故郷の村で。ジャコメッティとともに過ごしたすばらしい日々を写した283点。四二〇〇円

### 昭和の作曲家たち

太平洋戦争と音楽  
秋山邦晴 海軍・陸軍楽隊、日本プロレタリア音楽同盟、実験工房……日本の現代音楽の歴史を問い直す。林淑雄編 一三〇〇〇円

### 新装復刊 [9月]

新装版は、内容は従来の版と変わりませんが、改めて新しい読者へ広くお届けするために、カバー装を一新いたしました。

### ヨーロッパ文明史

ローマ帝国の崩壊よりフランス革命にいたるギョーム・ブイヤールに国政を担った歴史家によるソルボンヌ講義録「文明」の概念に多くの示唆を与える。安土正夫訳 三六〇〇円

### ガロアと群論

リーバール 天才数学者が展開した群の考え方の基礎を、簡明な叙述とイラストによってわかりやすく紹介する。浜福謙訳 二八〇〇円

### ヒトの変異

人体の遺伝的多様性について  
ルロフ 私たちはみなミュータント。人体形成の謎をめぐる博物誌と遺伝子の華麗な競演。上野直人監修 築地誠子訳 三八〇〇円

### ハンナ・アレント、あるいは政治的思考の場所

矢野久美子 アレントの鍵概念「現われぬ」をめぐり、そしてアイヒマン論争の真意とは、思考の現場を真摯に追う。二八〇〇円

### 人間機械論

人間の人間性を利用 第2版  
ウィーナー サイバネティクスの父ウィーナーがその学問分野の本質を、数学的記号を用いずに述べる。鎌田誠一訳 三五〇〇円

### 新装復刊 [10月]

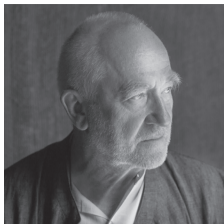
神谷美恵子 生誕100年の今年、若き日に綴られた魂の躍動と確かな知性を映し出す。次の一冊を、新装版といたしました。

### 若き日の日記

神谷美恵子 一九四二—四五年。生きがいに「ついで」の思索はこの時点ですでに始められていた。自己省察の極限を映す。三三〇〇円

(以上、本年10月の新刊・復刊書を発行月順にご紹介しました。10月下旬の最新の復刊は八面に案内しています)





ツムトア

『この題目、(空気感) (アトモスフィア)』といいますが、その依って来たところは、次のようなことです。私はすでに長い間(すぐれた質の建築とはいつたんだらうか)という言葉をもちろん、私がそのような関心を持つのは当然のことであるわけですが、考えてきました。これには私には比較的簡単に答えが出せません。少なくとも私にとって、良質の建築とは、建築のガイドブックに出てくるようなものでもなければ、建

『建築を考える』につづく講演集

ペーター・ツムトア 鈴木仁子訳



『動いている庭』はクレマンの「庭」の考え方が独自の言葉・概念で表現された氏の主著だ。フランス中東部のクルーズ県に購入した四〇〇ヘクタールの土地(谷「野原」)で実験・試行錯誤をくりかえ

『地球という庭』の思想

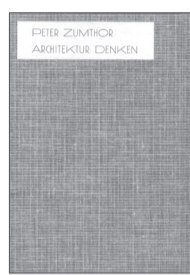
ジル・クレマン 《動いている庭》 山内朋樹訳



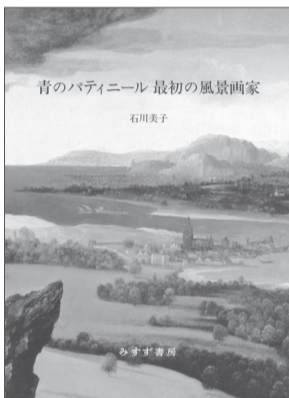
クレマン

すその経験をもとに、植物の動き(ずれ、放浪...)をとり入れ、偶然を尊重する庭を生みだしてゆく。アンドレ・シトロン公園での実践を例に植物の変化と多様性(一年草、二年草の活用)を重視する手法が紹介される。植物リスト、植物の動きによる庭の変化を捉えた図、カラー写真多数収録。庭づくりに関心のある人のみならず人がつくり出す風景、地球環境への問いを含んだ書として広がりをもって読まれるだろう。『園芸・環境・建築・芸術』(二月上旬刊) (A5変型320頁・予四八〇〇円)

築史に登場すると、本に収録されるとかいうものではない。建築の質とは、私にとっ ては、建物が心に触れること、という、それだけに「空気感」といって、卓越した素材使用が生み出す静けさと温かみを備えた空間。本書でツムトアは、自身が建築によって創り出した時間、感性を注ぎ込み検討する観点、その背後にある美的感覚について、九十三の補足的な角度から具体的に語る。『建築を考える』(小社刊)につづき、建築家の使命をまっすぐに見つめ、考え、自身と私たちに問いかけていくのだ。言葉とともにこの本を構成するのは、ページをめくる毎に現れるイメージだ。ツムトアがここに収めた風景、人物、絵画...これら愛着と憧憬



『建築・芸術』(二月上旬刊) (A5変型84頁・予三四〇〇円) 好評既刊 ツムトア『建築を考える』鈴木仁子訳(普及版三二〇〇円、特装版一五〇〇〇円)。特装版はツムトアの十葛西薫アートディレクション、須藤玲子オリジナルクロス装、特別付録「コロタイプ」によるツムトアの建築ドローイング一葉、残部僅少です。



青のパティニール 最初の風景画家 石川美子

驚くべき画家の再発見

石川美子

《青のパティニール 最初の風景画家》

フェルメールもラ・トゥールも、いったん忘れられながら、作品にそなわる独特の魅力がふたたび発見され、今では多くのファンが存在している。最初の風景画家パティニールも、そんな運命の入り口に立っているのではないかと。二〇〇七年にブラド美術館で大きなパティニール展が開催された。そのとき作られた映画をパティニールに見る機会を得た著者は、スクリーンに映し出された作品の細部の青い海と空に見とれてしまう。「あの水平線の向こうに行ってみたい」という思いがわきあがって、胸が苦しくなってくる。

■クレマン来日 本書の著者ジル・クレマンが総合地球環境学研究所の招きにより来年の二月に来日し、各地で講演を行います。ふるつてご参加下さい(日程・登壇者は変更となる場合があります)。▽2月21日(日)日仏会館(東京) 講演と山内朋樹氏(関西大学)とのパネルディスカッション(PD) 16時18時、入場無料▽2月23日(火)総合地球環境学研究所(京都) 講演と村松伸(地球研教授)・篠原徹(琵琶湖博物館館長)・白幡洋三郎(国際日本文化研究センター名誉教授)・山内各氏とのPD、13時17時、入場無料▽2月27日(土)アンステイチュ・フランセ(関西)京都 稲畑ホール 講演と田瀬理夫氏(造園家)とのPD、18時20時半、入場無料。詳細は各会場のホームページにてご確認ください。

移動しながら混濁する植物の新しい姿を提起する。ともに、エドゥアール・グリッサン『全「世界論」』(恒川邦夫訳、みすず書房、二〇〇〇年〔現在品切れ〕)が構想したような多様な文

「動いている庭」へ 読むガイド 田瀬理夫さんの話をつづけて(筑摩書房、二〇一三年)で描かれる田瀬の実践もまた、まったく違う条件のなかでおこなわれているけれど、「できるだけあわせて、なるべく逆らわない」というクレマンの言葉と、遠く響きあう。



若島さん(左)と羽生名人(右)

『ポビー・フィッシャーを探して』 刊行記念イベント 紙上報告

チェスこそが本物。チェスはスポーツ、芸術、哲学が一つになったもの。神童ジョッシュとその父が歩んだ道のりを描くフレッド・ウェイツキン『ポビー・フィッシャーを探して』の刊行を記念して、「盤上の冒険者たち」将棋と詰将棋のマスターが語るチェスの世界」がこの9月、三省堂書店神保町本店で開催されました。

現するという感じですが、僕はよく思うのですが、将棋とかチェスの場合には、一番面白いのは自分の考えていることが実現しないということなんじゃないかと。羽生 ああ、実践はそうですね。相手がいるので、だいたい自分の読み筋どおりにならないというところはありますが、相手の人がどうしているかを考えている人かとか、(相手が描きそうな)構想を気にかけていくということはある。あとは、チェスのエンドゲームなんかは特にそうだと思います。少しづつ強くなっている国際大会に出ると、(羽生名人がふつうのプレーヤーと違うことは)チェスの強い方はすぐわかります。レーティング(チェスプレーヤーのレベルを表す評価値)を別としても、集中力がふつうじゃないとか、いろいろなアイデアをもっているということ、(その理由を相手)がちょっと確かめると、「ああ、将棋という世界があるのか」と知ることになり、(羽生名人がチェスを指すこと)がかけ橋、文化の交流になっていると思います。

若島 若島さん(左)と羽生名人(右)の対談より

若島 詰将棋と将棋、チェスプロブレムとチェスの大きな違いは、詰将棋・チェスプロブレムは一人でやりますから、一人ですべてコントロールできるということ。そのへんが面白いところで、自分が考えていることが完全に盤上に実

若島 たえば20手先にこんなことになるんじゃないか、とかを想像している感じですか? 羽生 よく詰将棋を解くときに詰め上りの形を思い浮かべて、そこでどう解いていくかというアプローチをしますが、それは指し将棋でも同じようなことをしている。ただ、実践の場合にはそのようなアプローチの先でつじつまを合わせられるかどうかという問題はありますね。たぶん詰将棋を解く場合だと時間が無制限にあるので、(現局面から詰め上がり図までの)一番良い方を探して、もう、とんでもなく強いです。アメリカの数年前の大会でGM(最高ランクのチェスプレーヤー)と試合をしたとき、ビルツ・ディフェンスを使ったんですけど、すごくて。(レーティング)2500を超えているレベル(の指し回し)を見せたんですね。

若島 それは(羽生名人の)将棋と似ているといえれば似ている(笑)。ピノー やっぱ(笑)。もう15年ぐらい前ですか、どうして羽生さんと知り合いになったかという...羽生さんが最初にチェスを始めたときは、おそらく外国人とのコミュニケーションのためにチェスを勉強していったんだと思います。少しづつ強くなっている国際大会に出ると、(羽生名人がふつうのプレーヤーと違うことは)チェスの強い方はすぐわかります。レーティング(チェスプレーヤーのレベルを表す評価値)を別としても、集中力がふつうじゃないとか、いろいろなアイデアをもっているということ、(その理由を相手)がちょっと確かめると、「ああ、将棋という世界があるのか」と知ることになり、(羽生名人がチェスを指すこと)がかけ橋、文化の交流になっていると思います。

若島 プロの棋士の中のもう一人、森内先生(森内俊之竜王)もピノーさんがチェスを指導されたというふうにいるんですけど、森内先生のチェスというのはどんなスタイルでしょうか? ピノー じわじわ。 若島 じわじわ(?!)。 会場 (爆笑)

若島 面白い... (笑)。ピノー(森内竜王)は一度自分のスタイルに合った局面になるまで、(現局面から詰め上がり図までの)一番良い方を探して、もう、とんでもなく強いです。アメリカの数年前の大会でGM(最高ランクのチェスプレーヤー)と試合をしたとき、ビルツ・ディフェンスを使ったんですけど、すごくて。(レーティング)2500を超えているレベル(の指し回し)を見せたんですね。

若島 プロの棋士の中のもう一人、森内先生(森内俊之竜王)もピノーさんがチェスを指導されたというふうにいるんですけど、森内先生のチェスというのはどんなスタイルでしょうか? ピノー じわじわ。 若島 じわじわ(?!)。 会場 (爆笑)

若島 それは(羽生名人の)将棋と似ているといえれば似ている(笑)。ピノー やっぱ(笑)。もう15年ぐらい前ですか、どうして羽生さんと知り合いになったかという...羽生さんが最初にチェスを始めたときは、おそらく外国人とのコミュニケーションのためにチェスを勉強していったんだと思います。少しづつ強くなっている国際大会に出ると、(羽生名人がふつうのプレーヤーと違うことは)チェスの強い方はすぐわかります。レーティング(チェスプレーヤーのレベルを表す評価値)を別としても、集中力がふつうじゃないとか、いろいろなアイデアをもっているということ、(その理由を相手)がちょっと確かめると、「ああ、将棋という世界があるのか」と知ることになり、(羽生名人がチェスを指すこと)がかけ橋、文化の交流になっていると思います。

\* 特設ウェブサイト http://bobby.msz.co.jp/では、対談と大盤解説の全文、写真、動画を公開しています。 ウェイツキン『ポビー・フィッシャーを探して』若島正訳(本紙四面下広告)



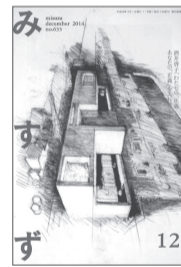
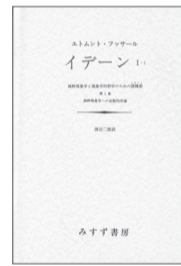
書評にとりあげられた本より 2014年1-12月(順不同です)

- ロラン・バルト『明るい部屋』 田中純氏(『UP』9月号)
ジェームズ・ジョル『第一次世界大戦の起原』[改訂新版]
木幡洋一氏(朝日新聞3月2日)・田所昌幸氏(読売新聞8月3日)
松尾尊発『大正デモクラシー期の政治と社会』 成田龍一氏(週刊読書人7月25日)
細川周平『日系ブラジル移民文学』[全2巻] 秋尾敏氏(『俳壇』1月号)
柘植あづみ『生殖技術』 最相葉月氏(朝日新聞3月16日)・上野千鶴子氏(毎日新聞3月25日)
アンドレイ・シニャフスキー『ソヴィエト文明の基礎』
渋谷謙次郎氏(週刊読書人4月11日)・渡辺京二氏(『エコノミスト』6月24日号)
深野稔生『銀嶺に向かって歌え』 河北新報7月13日
ジョン・キーン『デモクラシーの生と死』[全2巻]
吉田徹氏(日本経済新聞1月26日)・水野和夫氏(朝日新聞2月2日)・宇野重規氏(読売新聞2月16日)・小林良彰氏(公明新聞3月24日)・大澤真幸氏(北海道新聞4月6日)
黒沢文貴『大戦間期の宮中と政治家』 荒船俊太郎氏(『日本歴史』3月号)
多田隆治『気候変動を理学する』 鎌田浩毅氏(『SQUET』4月号)・東京大学理学研究科『理化学部ニュース』7月号・大河内直彦氏(Japan Geoscience Letter, No. 1)
K. ケリー『テクニウム』 佐藤俊樹氏(日本経済新聞8月3日)・角幡唯介氏(朝日新聞9月7日)
ティモシー・フェリス『スターゲイザー』 原智子氏(月刊『星ナビ』4月号)
ジョン・ルカーチ『歴史学の将来』 坪内祐三氏(『本の雑誌』3月号)
ダニエル・J. ソロヴ『プライバシーの新理論』 季刊『企業リスク』1月号
レオ・オルデンバーグ『サードプレイス』 南陀綾繁氏(『コンフォルト』4月号)
高桑信一『山と溪に遊んで』 柏瀬祐之氏(『山と溪谷』1月号)・東京新聞2月9日
成田康子『高校図書館』『都市問題』1月号・まさきとしか氏(北海道新聞2月16日)・堤真紀氏(『図書館雑誌』3月号)・木下通子氏(『図書館界』7月号)
鈴木二『寝るべき建築』
五十嵐太郎氏(週刊読書人7月25日)・井上章一氏(日本経済新聞10月1日夕刊)
小泉恭子『メモリスケープ』 井上文氏(西日本新聞3月9日)・粟谷佳司氏(図書新聞4月5日)
S. グリーンブラット『シェイクスピアの自由』 富山太佳夫氏(毎日新聞4月27日)
ローラ・フリント『統合失調症の母と生きて』『クレオンハウス通信』Woman's EYE』235号
ポール・シーブライト『殺人ザルはいかにして経済に目覚めたか?』
根井雅弘氏(北海道新聞2月16日)・山田鏡夫氏(日本経済新聞3月16日)
ヘンリー・ヒッチングズ『英語化する世界、世界化する英語』
浦田和幸氏(北国新聞6月8日他)・小林章夫氏(北海道新聞7月16日)
高橋たか子『終りの日々』 陣野俊史氏(日本経済新聞2月5日)
山本義隆『世界の見方の転換』[全3巻]
水野和夫氏(朝日新聞6月1日)・池内了氏(信濃毎日新聞6月8日)
近藤等則/佐藤卓『空の気』 渡邊十糸子氏(『週刊新潮』7月24日号)
富岡悦子『パウル・ツェランと石原吉郎』
岡崎武志氏(『サンデー毎日』3月2日号)・細見和之氏(秋田さきかけ新聞3月16日他)
スチュアート・D. ゴールドマン『ノモンハン1939』
塚本勝也氏(日本経済新聞2月16日)・中島誠之助氏(産経新聞3月26日)・阪元正康氏(北海道新聞4月13日)・北国新聞3月2日・信濃毎日新聞3月9日・神戸新聞3月9日
川本徹『荒野のオデュッセイア』 伊藤洋司氏(週刊読書人3月28日)
ポール・ヘガティ『ノイズ/ミュージック』 島中実氏(Tower Records『Intoxicate』6月号)
ポール・ファーマー『復興するハイチ』
渡辺靖氏(日本経済新聞4月27日)・開沼博氏(読売新聞5月25日)・『KOKUTAI』6月号
野呂邦暢『兵士の報酬』 田中俊廣氏(毎日新聞(西部本社版)6月29日)・青木有一氏(読売新聞8月10日)・下野新聞6月15日他・朝日新聞7月13日
鶴飼哲『ジャッキー・デリダの墓』
若松英輔氏(読売新聞7月6日)・郷原佳以氏(週刊読書人7月25日)
『死ぬふりだけでやめとけや 弐雄二詩文集』 若松英輔氏(読売新聞5月11日)・荻上チキ氏(朝日新聞6月1日)・東京新聞5月25日・日本経済新聞6月8日
ジュリー・ウェクスラー/デヴィッド・リッツ『私はリズム&ブルースを創った』
小出斉氏(『ロード・コレクターズ』8月号)・鈴木啓志氏(『ミュージック・マガジン』8月号)
ロバート・M. サポルスキー『サルなりに思い出す事など』
金森修氏(日本経済新聞6月22日)・斎藤環氏(毎日新聞6月29日)・渡辺政隆氏(信濃毎日新聞7月6日他)・柳川久氏(北海道新聞7月20日)・角幡唯介氏(朝日新聞7月20日)・星野博美氏(『AERA』7月21日号)・服部文祥氏(『母の友』9月号)・羽仁進氏(公明新聞9月15日)・読売新聞7月20日・『婦人公論』8月号
トビー・ドッジ『イラク戦争は民主主義をもたらしたのか』
藤原一氏(朝日新聞7月15日)・高橋和夫氏(公明新聞9月8日)・中岡望氏(『週刊東洋経済』9月13日号)
ルイジ・ギリ『写真講義』
幅允孝氏(東京新聞7月20日)・平野有優氏(週刊読書人7月25日)・青木淳氏(読売新聞8月24日)・『フォトテクニクデジタル』10月号
ハリー・ハルトゥーニアン『アメリカ(帝国)の現在』
長谷川一氏(週刊読書人7月25日)・中尾茂夫氏(『エコノミスト』8月26日号)
パトリック・ドゥヴィル『ペストとコレラ』
松山峻氏(読売新聞6月15日)・佐久間文子氏(『本の雑誌』8月号)・陣野俊史氏(『サンデー毎日』8月10日号)・鹿島茂氏(『週刊文春』9月25日)・風野春樹氏(『本の雑誌』10月号)
五島綾子『科学ブーム』の構造』
佐藤健太郎氏(信濃毎日新聞9月7日)・金子務氏(東京新聞8月10日)・佐倉統氏(朝日新聞9月14日)・毎日新聞9月16日夕刊・濱田武士氏(読売新聞9月28日)・『現代化学』10月号
トーマス・ベルンハルト『私のもらった文学賞』
藤原智美氏(『エコノミスト』7月15日)・池澤夏樹氏(『週刊文春』7月17日)
鳥飼玖美子『英語教育論争から考える』
小川吉造氏(時事通信社『内外教育』9月16日号)・須藤靖氏(読売新聞10月19日)
フレッド・ウェイツキン『ボビー・フィッシャーを探して』 松本哲平氏(『週刊将棋』9月24日)・佐久間文子氏(『週刊文春』10月9日号)・大崎善生氏(日本経済新聞10月12日)・松江杉恋氏(信濃毎日新聞10月12日)・『ダ・ヴィンチ』10月号
ブルース・チャトウィン『黒ヶ丘の上で』
堀江敏幸氏(毎日新聞9月21日)・尾崎真理子氏(読売新聞9月21日)・木下卓氏(週刊読書人9月26日)
G. ディディ=ユベルマン『ヒステリーの発明』[全2巻]
橋本一徑氏(図書新聞6月14日)・福本修氏(『精神療法』10月号)
ヴァルター・ベンヤミン『この道、一方通行』 石川日向子氏(『AERA』6月30日号)



大隈重信

近年、近代日本に活躍した人びとの翻刻資料集が続々と刊行されているが、編纂に十一年の歳月を要した本書は、それらを凌駕し得る規模と価値がある。本書全巻の完結が大隈重信研究にとどまらず、近代日本研究の多様な分野に寄与し、近代日本像の再構築に貢献していくことを切望したい。『日本近代史・政治』【三月上旬刊】(A5判550頁・一五〇〇〇円)
▼既刊①⑧各一〇〇〇〇円
⑨⑩各二二〇〇〇円



『大隈重信関係文書』の第11巻には、若槻礼次郎など「よこら」の差出人および姓名不詳書翰を収めた本巻部分に加えて、刊行後に発見された多くの書翰、当初は予定していなかったさまざまな機関や個人が所蔵していた大隈宛の書翰を「補遺」「補遺・別紙」「追補」として収録する。その他、完結にあたって必要な情報も入れた。

『最新の研究成果、全11巻完結』
早稲田大学史 大隈重信関係文書 11
資料センター編
よこら・補遺他

『中期の代表作、待望の日本語版』
エドムント・フッサー
立松弘孝訳
『形式論理学と超越論的論理学』
「近代の諸学に欠けているのは非常に広範ではあるが、しかし原理的に統一された意味での学問論的な諸問題と諸原理を、すべて包括する真の論理学」つまり「超越論的論理学」として、認識についての最も深い自己認識によって諸学の進路を照らして、諸学がそのあらゆる営為を理解し

『論理学研究』
「イデオン」以後、一九二〇年代の講義「受動的総合の分析」をへて、一九三二年「デカルト的省察」にはじまる後

『読書アンケート特集』と『定期購読のご案内』
「みすず」次号は、毎年ご好評をいただき「読書アンケート特集」掲載の1・2月号合併号です(二月一日発行)。

- サン=テグジュペリ 山崎庸一郎訳
夜間飛行
平和か戦争か
ある人質への手紙
心は二十歳さ
シリーズ『理想の教室』
亀山郁夫『悪霊』神になりたかった男
吉永良正『パンセ』数学的思考
巽孝之『白鯨』アメリカン・スタディーズ
三原弟平 カフカ『断食芸人』(わたし)のこと
小沼純一 バッハ『ゴルトベルク変奏曲』世界・音楽・メディア
樋口陽一『日本国憲法』まっとうに議論するために
名和小太郎 エジソン 理系の想像力
野村喜和夫 ランボー『地獄の季節』詩人になりたいあなたへ

みすず書房の電子書籍

現在全48点

世紀をこえ世をこえ読みつがれるこの名著を、さまざまな読書環境で、いっそう多くの方へお届けしたいとの願いをこめて電子書籍化しました。

ヴィクトール・E. フランクフル 池田香代子訳
夜と霧 [新版]



ヴィクトール・E. フランクフル 霜山徳爾訳
夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録

サウンドスケープ生態学のパイオニアが、生物たちと自然環境がつくる色彩豊かな音響の意味を明らかにしたこの本は、電子書籍では、著者の語る音風景の一部を、文字で読みながら実際に聴くことができます。

バーニー・クラウド 伊達淳訳
野生のオーケストラが聴こえる
サウンドスケープ生態学と音楽の起源

- 青柳いづみこ 水の音楽
池内紀 ちいさなカフカ
池内紀 なじみの店
池内紀 無口な友人
池内紀 あだ名の人生
外山滋比古 あたまの目
外山滋比古 忘却の力
池内了 寺田寅彦と現代
荒川洋治 夜のある町で
荒川洋治 世に出ないことば
片山敏彦 詩心の風光 [新版]
長田弘 知恵の悲しみの時代
大井玄 いのちをもてなす
外岡秀俊 傍観者からの手紙
小沢信男 通り過ぎた人々
田中真澄 ふるぼん行脚
大竹昭子 随時見学可
辻由美 読書教育
中井久夫 臨床瑣談

- 中井久夫 臨床瑣談続
中井久夫 災害がほんとうに襲った時
中井久夫 復興の道なかばで
山本義隆 福島原発事故をめぐる
風丸良彦 村上春樹短篇再読
風丸良彦 村上春樹(訳)短篇再読
鳥飼玖美子 通訳者と戦後日米外交
北條文緒 プルムズベリーふたたび
ウルフ 出淵敬子訳 三ギニー
サイデンステッカー 山口徹三編
谷中、花と墓地
アラン 橋本由美子訳 小さな哲学史
東アジア出版人会議編
東アジア人文書100
フィリップ 山田稔訳 小さな町で
村井章子訳 ミル自伝





「民主主義の名におけるファシズム」ほか

丸山眞男手帖の会編 丸山眞男 話文集

続3 全4巻

「このシンボルを特定の意味に限定して行く方向がとられる。これは現在、アメリカで進行している過程ですけれども、日本でも今後ますます行われるでしょう。それは「民主主義的自由」という考え方を漸次限定して行つて、国民の意識なり思想を規格化し、画一化して行くことです。元来英米流の民主主義は、そういう思想なり言論の面に於ける多様性の尊重、多様化を通じての統一ということが前提になつてゐる。ところが「民主主義」が自己を積極的に実現して行くという方向で



「丸山眞男話文集」全四巻を漸次に発掘された、丸山眞男の座談、講演などを続編として刊行。第三巻は、「民主主義の名におけるファシズム」「社会主義とその周辺」「二つの青年層」の座談三編をはじめ、陸羯南との出会いを辿つた「陸(最上)家訪問録」、さらに「文明論之概略」読解や湾岸戦争、「集団的自衛権」の欺瞞性などが話題になつた「楽しき云(安東仁兵衛、石川真澄、岩見隆夫、筑紫哲也、堤清一との座談)の記録三編」を収録する。「政治学・思想史」(四六判・376頁・五〇〇〇円)

http://aiseien.go.jp/

今年、生誕100年を記念して

出版情報紙「パブリッシャーズ・レビュー」のご案内

「若き日の日記」を新装復刊(本紙四面下・五面下に広告)

神谷美恵子 読書感想文コンクールのお知らせ

神谷美恵子 読書感想文コンクールのお知らせ

精神科医・神谷美恵子の生誕100年を記念して、たくさんの方々に神谷美恵子の著作にふれていただき、豊かな人間性をはぐくみ、よりよく生きるための機会としていただきたいとの願いをこめて、「読書感想文コンクール」が開催されます(主催：国立療養所長島愛生園・公益財団法人長瀬会・長島愛生園歴史館・長島愛生園入所者自治会、後援：みずず書房)

「長門洋平『映画音響論』」が、第36回サントリー学芸賞(芸術・文学部門)を受賞しました。選評に「いきなりとつてもない大作が出現した。本書のタイトルが『映画音響論』であり、『映画音楽論』ではないことが、これまでの論の問題点と本書の斬新さのありかを端的に示している(…)音に着目することで溝口研究に新たな次元を切り開いたことは間違いないし、音や音楽の研究が映画研究にとつて決して副次的ではなく、時に死命を制するほどに中核的な役割を担うことを、説得力豊かに示した(渡辺裕・東京大学教授)。(本紙二面下広告)

好評、重版出来 鳥飼玖美子『英語教育論争から考える』

英語を義務教育にするのは本来無理、中学で「世界の言語と文化」という教科を設け、大学入試から外国語をなくすとの試案を、一九七四年、平泉渉氏(当時参議院議員)が提出。これに対し渡部昇一氏(当時上智大学教授)が、「亡国の『英語教育改革試案』をオビニオン誌『諸君!』」に掲載。以来誌上で繰り返げられた大論争は、決して実用vs教養の浅薄な対立ではなかつた。その議論の厚みと多様性を検証し、現在の教育のあり方を問い直す鳥飼玖美子『英語教育論争から考える』は、須藤靖氏はじめ多くの書評で紹介され教育界に反響をよんでいます。(本紙四面下広告)



基本図書 限定復刊

10月

相対性理論

メラー 相対性理論の教科書。特殊相対性理論と一般相対性理論について、三次元的定式化を中心に講義する。永田・伊藤訳 ¥7400

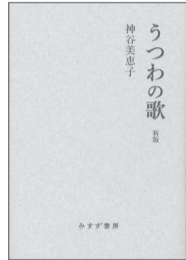
古典物理学を創った人々

ガリレオからマクスウェルまで

セグレ 落下法則の確立から、電磁気学の建設まで。近代物理学を形成した学者たちの姿をあざやかに描写する。久保・矢崎訳 ¥7400

量子力学の数学的基礎

ノイマン ゲーム理論の先駆者の名著。ヒルベルト空間論により、量子力学を数学的論理的に基礎付ける。井上・広重・恒藤訳 ¥5200



みずず書房 近刊のお知らせ

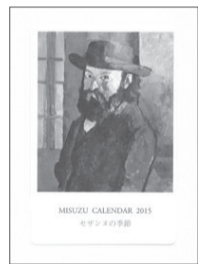
来年2-3月の刊行予定から

- 健康という虚構—なぜ不健康は罪なのか(仮) メッソル/カークランド編 細澤仁他訳
にもかかわらず ロース 加藤訳 鈴木・中谷監修
相互扶助の経済—日本民衆思想史 1750-1950 テツオ・ナジタ 五十嵐暁郎監訳
国のうちに(仮) <文学シリーズ lettres> L.ヴァン・デル・ポスト 戸田章子訳
いつ福島は農林水産業は復興するか 濱田武士・小山良太・早尻正宏
ヘイト・スピーチという危害 J.ウォルドロン 谷澤正嗣・川岸令和訳
誕生のインファンティア(仮) 西平直
量子力学と経路積分 [新版] ファインマン/ヒップス スタイヤー校訂 北原和夫訳
鉦夫画家たち W.フィーバー 乾由紀子訳
ワシーリー・グロスマン作品集 1 齋藤紘一訳
近代デザインの美学 高安啓介 (http://www.msz.co.jp にもご案内)

みずず書房・最近の重版より

- 英語教育論争から考える 鳥飼玖美子 ¥2700
夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録 V.E.フランクル 霜山徳爾訳 ¥1800
夜と霧 新版 V.E.フランクル 池田香代子訳 ¥1500
こころの旅<神谷美恵子コレクション> 米沢富美子解説 ¥1600
人類の星の時間 S.ツヴァイク 片山敏彦訳 ¥2500
貧乏人の経済学 A.V.バナジー/E.デュフロ 山形浩生訳 ¥3000
殺人ザルはいかにして経済に目覚めたか? P.シーブライト 山形浩生・森本正史訳 ¥3800
モノからモノが生まれる B.ムナーリ 菅野有美訳 ¥3600
映画もまた編集である ウォルター・マーチとの対話 M.オンダーチェ 吉田俊太郎訳 ¥4800
角運動量とスピンの『量子力学』補巻 朝永振一郎 亀洲迪他編 ¥4200

みずず書房 営業部だより



話題騒然のピケティ『21世紀の資本』をついに刊行しました。原著のフランス語版が英訳され、アメリカで大ベストセラーになったことで一躍注目をさらった本です。日本語版刊行の数カ月以上も前からマスコミに取り上げられて熱気が高まり、早期の刊行を望まれるようになりました。幸いにも訳者の方々のご尽力により、年内の刊行が実現し、待ち望む多くの読者の皆様のご期待にお応えすることができました。来年が皆様にとって、よいお年となりますように。

話題騒然のピケティ『21世紀の資本』をついに刊行しました。原著のフランス語版が英訳され、アメリカで大ベストセラーになったことで一躍注目をさらった本です。日本語版刊行の数カ月以上も前からマスコミに取り上げられて熱気が高まり、早期の刊行を望まれるようになりました。幸いにも訳者の方々のご尽力により、年内の刊行が実現し、待ち望む多くの読者の皆様のご期待にお応えすることができました。来年が皆様にとって、よいお年となりますように。

毎年この時期に作成している小社の総合図書目録ができあがりしました。ロングセラーはもちろんのこと、本年十一月までに刊行した最新刊、新シリーズ、オンデマンド版最新の復刊書、電子書籍、在庫僅少本まで、たぐいま出庫可能な一〇〇〇点余をジャンル別にご紹介しています。ご活用いただければ幸いです。本紙添付のハガキにて、どうぞご請求下さい。

きたと思います。来月には著者が来日され、講演会などが予定されています。さらなる盛り上がりが見込まれます。ぜひご一読いただければと思います。

おかげさまで今年も数多くの書籍を刊行することができました。ご期待に添う本に出会っていただけましたならば、まことに幸いです。さまざまなお意見を拝聴しながら、引き続き自信を持って刊行してまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。

来年が皆様にとって、よいお年となりますように。

図書目録 2015年版出来

〇円分の切手をご同封の上、みずず書房営業部(〒113-0033 文京区本郷5-32-21)までお早めにお申し込み下さい。

「長門洋平『映画音響論』」が、第36回サントリー学芸賞(芸術・文学部門)を受賞しました。選評に「いきなりとつてもない大作が出現した。本書のタイトルが『映画音響論』であり、『映画音楽論』ではないことが、これまでの論の問題点と本書の斬新さのありかを端的に示している(…)音に着目することで溝口研究に新たな次元を切り開いたことは間違いないし、音や音楽の研究が映画研究にとつて決して副次的ではなく、時に死命を制するほどに中核的な役割を担うことを、説得力豊かに示した(渡辺裕・東京大学教授)。(本紙二面下広告)

好評、重版出来 鳥飼玖美子『英語教育論争から考える』

英語を義務教育にするのは本来無理、中学で「世界の言語と文化」という教科を設け、大学入試から外国語をなくすとの試案を、一九七四年、平泉渉氏(当時参議院議員)が提出。これに対し渡部昇一氏(当時上智大学教授)が、「亡国の『英語教育改革試案』をオビニオン誌『諸君!』」に掲載。以来誌上で繰り返げられた大論争は、決して実用vs教養の浅薄な対立ではなかつた。その議論の厚みと多様性を検証し、現在の教育のあり方を問い直す鳥飼玖美子『英語教育論争から考える』は、須藤靖氏はじめ多くの書評で紹介され教育界に反響をよんでいます。(本紙四面下広告)

今年、生誕100年を記念して出版情報紙「パブリッシャーズ・レビュー」のご案内

「若き日の日記」を新装復刊(本紙四面下・五面下に広告)